

カナでの婚礼

ヨハネによる福音 2:1-11

(そのとき、) ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メートル入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

説教

ロシアの小説のなかで病床でヨハネ福音書を枕経のように病人に読み聞かせている場面があります。わたしも死の床についたときにはぜひヨハネを聞きたいなとおもっているのです、私にそのときがきたら誰か私の願いを思い出してください。さて、こんなヨハネ好きのわたしにとってきょうの朗読箇所は好きだけどよくわからない聖書箇所でもあります。

ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」 2:3-4

いきなりマリアにむかって婦人といったり、木枯らし紋次郎でもあるまいに「あっしにはかかわりのないこと」といつてみたり、わたしの時はまだ来ていない、となぞかけのような受け答えをします。イエスの真意がよくわからないところです。

結婚の宴会 = 今風にいえば披露宴でぶどう酒が足りなくなり、そのピンチをイエスが水をぶどう酒に変えるという奇跡によって切り抜けた、というのがきょうの聖書箇所のできるあらすじです。

初手から (2:1-3) つっこみどころはたくさんあって、なんでイエスが弟子たちとともにその婚礼の宴会に招かれたのか？なんでマリアがそこにいてぶどう酒係のような役目をしているのか？どうしてマリアとよばずにイエスの母という言い方をヨハネ福音書ではするのか？などなどです。

このストーリーはしばしばイエスの最初の奇跡と呼ばれています。理由はわたしにははっきりしないのですが、どうも福音書の最初のほうにでてくる奇跡物語なのでそう呼んでいる人たちがいるということらしい。たしかにマタイやルカの福音では2章ではまだイエスが生まれるか生まれないかのあたりです。でもマルコの福音書では1章から病気直しの奇跡をイエスはおこなっているのに、なぜかこのヨハネのカナの婚礼の奇跡が最初ということになっています。福音書のイエスの奇跡は35ある？なんていう人もいうのですが病気直しは奇跡にカウントしていないのかもしれない。

わたしは説教と称して福音書の説明・解説を毎週しているのですが、ひとが聖書を読む、福音書を紐解くのは救いを求めているからです。べつに解説を聞きたいからではないはず。なかにはへそ曲がりもいて福音書のなぞが解ければ救いが手に入るって思っている人もいるかもしれませんが、説明されて納得したところで救われるとは限りません。ガリラヤのカナというのは

どこそこにあつて、今では婚礼教会が建っているとか、当時の婚礼宴会は一週間続いたとか説明されても、あっそうですかですよ。イエスじゃありませんがそれが「わたしとどんなかかわりがあるのです」といいたくになります。解説なんて救いを求める人にとってはなんの役にも立たないなあ、じゃ、きょうはおしまい、でもそれじゃあねえ～。

いまの世の状況でどうこの奇跡物語を受け止めればいいのか、わたしには確かなところはわからないので、伝統的な解釈を紹介してそれぞれに思いをめぐらすということで今日もおしまいにしようと思います。

1. ヨハネ 2 章のカナの婚礼は創世記の冒頭、天地創造になぞらえています。ヨハネ 1 章 19 節からきょうの 2 章 11 節までは時間の推移が記録されています。「その翌日」という記述が 3 回、三日目という記述が一回、きょうの出来事は合計で 6 日目という計算をします。これは神が創造のみわざをおこなった、6 日目には人をおつくりになっています、6 日目の出来事をなぞらえているという解釈です。
2. ぶどう酒は救いのシンボルで、水がぶどう酒に変わるという奇跡こそがイエスの救いのみ業だとする解釈です。
3. これに関連してマリアの問答のなかの「わたしの時はまだ来ていません」という答えは、十字架の時がまだきていない、イエスのみ業を完成するにはまだまだ時間がかかる？という解釈ができます。
4. さらにイエスの母（ヨハネ福音書ではなぜかマリアという呼び方をしていません）に対する救いへの招きのことばとして理解できます。

イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。ヨハネ 19:25-27

5. 花婿をイエスのたとえと理解する。

**だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すもの
ですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。 2:10**

この花婿を賞賛する宴会の世話役のせりふは、劣ったもの=旧約律法、良いぶどう酒=新約の救いのたとえとなる。

なんで水がめが6つだったのかは天地創造の6日目という暗示なのか、それともほかの意味合いでの象徴的な意味があるのかは、まだわたしにはよくわかりません。でも大きなかめ(60~90リットル入り)が6つつもあれば水を汲むのには時間がかかったろうし、さぞかし大変だっただろうなということはわかります。またそれを世話役のところまで運ぶとなると(60~90キロ相当)目が回ります。蛇足ながらわたしの感想をつけくわえると、どんなに大変でもいま汲んでいる水がイエスによってぶどう酒に変えられる、救いの水となるのだと信じていることができればいまの労苦なんてへっちゃらだ、となります。話は飛躍(おおげさ?)しますが正しい仕事をしなければならないなあと思います。
